

「上元」「蕊珠」と「金籍」「玉皇」

——元稹の詩文と道教世界——

砂 山 稔

序言

莫逆の友である白居易（七七二―八四六）とともに元白と並び稱される元稹（七七九―八三二）は、「聰警 人に絶し、年少にして才名有り」とされ、また、「性鋒 鋭、事を見れば風生ず」（『舊唐書』卷一一六、元稹傳）と言われる尖鋭な才物である。元稹は元白文學集團の旗手で、傳奇小説「鶯鶯傳」の著者、唐代悼亡詩の名手でもある。⁽¹⁾ その元稹は、また、「唐故工部員外郎杜君墓係銘并序」（『元稹集』卷五十六）において、夙に杜甫を激賞

したことも知られるが、その文中に「甫 字は子美、天寶中、三大禮賦を獻じ、明皇（玄宗のこと）之を奇とす」と杜甫の「朝獻太清宮賦」などの「三大禮賦」に言及している。老子を祀った「太清宮」に關する「朝獻太清宮賦」の第一段の末尾において、杜甫は、玄宗と楊貴妃を「長樂之舍」に還る道教の最高神である元始天尊と「崑崙之丘」に歸る仙女の代表である西王母に見立てて、「歛臻於長樂之舍、嵬入於崑崙之丘」と詠じるが、この「朝獻太清宮賦」の濃厚な道教的雰圍氣は、元稹の有名な「連昌宮詞」に連なるものがある。ところが、この元

積と道教に關する研究は、不可思議なことに殆ど未開拓と言つて良く、その課題を今に残している。そこで小論では四節に分かつて、この中唐の代表的文人と道教との關わりを考察することとしたい。

第一節 上元・開元觀・玄宗・「連昌宮詞」

元稹の「法曲」〔和李校書新題樂府十二首并序〕の第五首、『元稹集』卷二十四）後半では次のように詠じる。

胡騎 煙塵を起してより、毛毳腥羶 咸洛に滿つ

女は胡婦と爲りて 胡妝を學び、伎は胡音を進め

胡樂を務む

火鳳聲沈んで 多く咽絶し、春鶯囀罷んで 長く蕭

索たり

胡音と胡騎と胡妝と、五十年來 紛泊を競う

咸洛は長安と洛陽。火鳳聲・春鶯囀は樂曲の名。⁽³⁾ 安史

の亂以後の狀況を歌うこの樂府で、元稹の意識は胡漢の中、全く漢（中華）の側に立っているようである。

元稹は北魏王朝を興した拓跋氏の王族の子孫であるこ

とに強いプライドを持っていた。既に花房英樹氏編の『元稹研究』では、その「世系」の冒頭で「元稹が歿してほどなく、白居易は一連の「挽歌詞」を捧げ、その一で、「銘旌官重咸陽盛、騎吹聲繁鹵簿長／後魏帝孫唐宰相、六年七月葬咸陽」と詠じていた。元稹は「後魏の帝孫」であり「唐の宰相」であった。この「後魏の帝孫」について、白居易は「贈尙書右僕射河南元公墓誌銘」で、「公即僕射府君第四子、後魏昭成皇帝十五代孫也」ともいう。元稹について、「後魏」の帝室の末裔であること、大きく言擧げしているのである。それは元稹自身の誇りとする所でもあった」と指摘している。⁽⁴⁾ これに加え、元稹は、漢民族の民族宗教である道教を奉じること、に何らの違和感も抱いていないように思われることは重要である。

早熟の才子であった元稹には、十八才の折の「開元觀閑居酬吳士矩侍御三十韻」〔『元稹集』卷十〕と題する詩が残されており、詩人が若年から長安の道觀に出入し、道教に親しんでいた様子が窺われる。詩は三十韻の長い

ものであるが、最初の二十句を見てみよう。「靜習して
狂心盡き、幽居して 道氣添う／神編 黃簡を啓き、祕
籙 朱籙を捧ぐ／爛熳として 煙霞駐まり、優游として
歳序淹う／壇に登りて 旄節を擁し、殿に趨りて 胡髯
に禮す（自注「殿に玄宗皇帝の眞容有り」）／醮は起こる
形庭の燭、香は開く 白玉の匳／盟を結びて 金劍重く、
魅を斬りて 寶刀銛たり／禹歩すれば 星綱動き、符を
焚けば 竈鬼詹る／冥搜して 直使を呼び、章奏して
飛廉を役す／仙籍 聊か檢ぶるを憑み 浮名 復た占を
爲す／赤誠もて 皓鶴に祈り 綠髪もて青練に代う」。
題下の自注には「十八時に作る」とあり、開元觀は『長
安志』卷九の道德坊の項に「本は隋の秦王浩の宅なり。
（中略）景雲元年、道士の觀を置く」とある。詩の中の
「竈鬼」について、周相録の『元稹集校注』卷十では、
唐の陸龜蒙の「祀竈解」に「竈鬼 時を以て人の功過を
録し、上りて天に白す」とあるのを掲げる。次に「飛
廉」については、「飛廉は風の神なり、一説に能く風を
致す神禽の名なり。『楚辭・離騷』に「前に望舒をして

先驅ならしめ、後に飛廉をして奔屬せしむ」とあり、王
逸注に「飛廉とは風伯なり」という。洪興祖の補注に
『呂氏春秋』に曰く、「風師を飛廉と曰う」應劭曰く「飛
廉は、神禽にして、能く風氣を致す」と注釋している。
因みに藤堂明保氏には、「鳳凰と飛廉」なる面白い論文^⑥
もあり、元稹の道教世界に頻りに登場する鳳凰の存在も
氣になるところである。ただ、ここの「飛廉」は、いか
にも道教神であるので、當時の社會に浸透していた「六
甲」の神の中の「黃素玉女飛廉」との關係も注目される。
この詩の「飛廉」は、「風伯」の側面と「六甲」の一柱
としての側面を複合的に持っていたのかもしれない。
ところで、先に引用した詩には、「殿に玄宗皇帝の眞
容有り」と元稹の自注が施されており、早くも玄宗皇帝
に對する彼の關心の深さを露わにしている。
さて、元稹の秀作である「連昌宮詞」（『元稹集』卷二
十四）の冒頭十二句は、次の様に詠じる。
連昌宮中 滿宮の竹、歳久しく人無くして森として
束に似たり

又た牆頭 千葉の桃有り、風 落花を動かして 紅
藪藪たり

宮邊の老人 予が爲に泣く、小年 食を進めて曾て
因りて入れば

上皇は正に望仙樓に在り、太眞は同じく欄干に憑り
て立つ

樓上樓前 盡く珠翠、炫轉熒煌 天地を照らす

歸來 夢の如く復た癡の如し、何の暇かありて備さ
に宮裏の事を言わん

連昌宮は、洛陽の西南にあつた宮殿。上皇は玄宗、太眞は楊貴妃の女道士としての號であり、「望仙樓」は何よりも玄宗の道教に對する心酔を表現していよう。元稹には、經濟的な濫費に關する「老佛」批判が僅かに存する（『叙詩寄樂天書』『元稹集』卷三十）ものの、白居易の「海漫漫」（『白詩集』卷三）のような道教批判が殆ど存在しないのが、彼の道教に對するスタンスの特徴である。

さて、詞はこの後、玄宗の側近である高力士が念奴を呼ぶところに展開するが、三十句を終えたところで、長

文の自注が加えられる。その冒頭と後半部分を取り上げよう。

「念奴とは、天寶中の名倡にして、善く歌うものなり。（中略）又た玄宗 嘗て上陽宮の夜後に新翻一曲を按ず、屬明夕正月十五日、燈下に潛遊し、忽ち酒樓上に笛もて前夕の新曲を奏する有るを聞く、大いに之に駭き、明日密かに笛ふく者を捕捉せしむ、詰めて之を驗するに、自ら云う、某其の夕 竊かに天津橋にて月を遊び宮中の度曲を聞き、遂に橋柱の上に譜を挿して之を記す、臣は即ち長安の少年の笛を善くする者にして李謨なりと、玄宗異として之を遣わす」

正月十五日は、道教の最も重要な祭日である三元日（上元…一月十五日、中元…七月十五日、下元…十月十五日）の内の上元の日である。この日はまた、元宵とも呼ばれて、街は萬灯が煌めいて賑わつた。

燈影（『元稹集』卷十七）

洛陽晝夜 車馬無し 漫ろに紅紗を挂く 滿樹の頭
見説す 平時 燈影の裏 玄宗 潛かに太眞を伴い

て遊ぶ

この詩を下孝宣の『元稹年譜』では、元和四年（八〇九）、元稹が監察御史として東台に分務した際の制作と考える。なお、吳偉斌の『新編元稹集』では、貞元十一年の元宵節（上元の日）の制作と見ている。上元の日ので作であることは間違いないだろう。

因みに王維の「元宵觀燈」を詠じた「奉和聖製十五夜燃燈繼以酺宴應制」を見ておこう。「上路 笙歌滿ち、春城 漏刻長し／遊人は晝日より多く、明月も燈光に譲る／魚鱗は翔鳳に通じ、龍輿は建章より出づ／九衢 廣樂を陳ね、百福 名香透る／仙妓 金殿に來り、都人 玉堂を繞る／定めて應に妙舞を偷み、此より新粧を學ぶべし／奉引 三事迎え、司儀 萬方列なる／願わくは天地の壽を將つて、同じく以て君王に獻せん」（『王維集校注』卷四）。

元稹にとって、道教の三元日は、「酬翰林白學士代書一百韻并序」（『元稹集』卷十）の詩の序文を、「玄元氏の下元の日」と書き出すほどに親しみ深いものであり、上

記の「連昌宮詞」の自注の正月十五日、則ち「元宵」の出來事もことさらに印象深く取り上げられているのになかろうか。

さて、『元稹集校注』の周相録氏は、『全唐詩』で徐凝の作とされる「正月十五夜呈幕中諸公」について、元稹の作であるとして次のように述べる。「長慶三年より大和三年まで越州に作る、時に（元稹）浙東觀察使・越州刺史たり。《全唐詩》の署名は徐凝なるも、實は元稹の詩と爲す、今 改正す。徐凝の酬和は《元相公の上元に奉酬す》爲り、次韻唱和す」と（續補遺卷二）。中々に有力な説である。先ず、徐凝の作を掲げる。

出でて樓船を擁す 千萬人、入りて台輔と爲る 九霄の身

如何んぞ更に羨やむ 燈夜を看るを、曾て見たり

宮花 面おもを拂うの春を

次に元稹の作を見る。この題は、徐凝の酬和から推して元來は「上元の夜、幕中の諸公に呈す」であったかも知れない。

宵遊す 二萬七千人、獨り重城に坐し 一身を圍かこう
月に歩むと山に遊ぶと 俱に得ず、憐れむ可し辜負
せる 白頭の春を

さて、「連昌宮詞」の終盤近くで、元稹は、「太平は誰か致せる 亂す者は誰ぞ」と問い、その答えとして、次のように述べる。「姚崇 宋璟 相公となり、上皇に勸諫して言語切なり／陰陽を變理して 禾黍は豊かに、中外を調和して 兵戎無し／長官は清平にして 太守は好く、揀選皆言う 相公に由ると／開元の末 姚宋死し、朝廷は漸漸として 妃子に由る／祿山は宮裏に 養われ て兒と作り、虢國の門前 鬧さわがしきこと市の如し／權を弄せる宰相は 名は記おぼえず、依稀として憶え得たり 楊と李と／廟謨は顛倒して 四海搖らぎ、五十年來 瘡瘡と作る」

宋の洪邁の『容齋隨筆』（卷十五）では、「元微之・白樂天は、唐の元和長慶の間に在りて名を齊しくし、其の天寶の時事を賦詠せる連昌宮詞・長恨歌はみな人口に膾炙す、之を讀む者をして情性蕩搖せしめ、身は其の時に

生じ、親しく其の事を見るが如くして、殆んど未だ優劣を以て論ずること易からざるなり」と言いつつも、先に挙げた「連昌宮詞」の姚崇以下の部分について、「蓋し元和十二年間の作る所、殊に風人の旨を得ること長恨の比に非ずと云う」としていて、陳寅恪氏の『元白詩箋證稿』の「元微之連昌宮詞實深受白樂天陳鴻長恨歌及傳之影響、合併融化唐代小説之史才詩筆議論爲一體而成」との有名な斷案と同じくない。

第二節 蕊珠・『鶯鶯傳』・『眞誥』と

『黃庭經』・『周易參同契』

元稹十六才の作とされる「清都夜境」（『元稹集』卷五）には、長安の道觀、清都觀における濃厚な道教の雰圍氣が次のように描かれる。「夜久しくして連觀靜かなり、斜月 何ぞ晶熒たる／寥天 碧玉の如く、歴歷として華星を綴る（中略）啓聖して空洞を發ひらき、朝眞して廣庭を趨る／閑かに聞く 蕊珠の殿、暗に関す 金字の經／屏氣するも動うごすれば方に息つき、神を凝せば 心 自ら靈

なり／悠悠たり 車上の馬、浩思 安んぞ寧きを得ん」。

清都觀のことは、『長安志』卷七には、「次南永樂坊、(中略)縣東清都觀、隋開皇七年、道士孫昂爲文帝所重、常自問道、特爲立觀、本在永興坊、武德初徙於此地、本隋寶勝寺」とある。

この「清都夜境」には、「蕊珠」の語が早くも見られるが、これは『黃庭內景經』上清章第一の冒頭近くにも「閑君蕊珠作七言、散化五形變萬神」と見え、元稹が道教について詠じる際に頻出する言葉である。

さて、元稹が言う「道書」「玉書」「素書」としては、道家・道教の經典である『老子』『莊子』『靈寶度人經』を始めとして、『眞誥』や張振謙氏が指摘する『黃庭經』『周易參同契』や、少し変わったところでは李淳風の『乙巳占』などを挙げることができる。また、李淳風の『金鎖流珠引』序と重なる語彙も見られるのが面白いところであろう。⁽⁷⁾

元稹の親友である白居易が、「七篇の眞誥、仙の事を論じ、一卷の壇經、佛の心を説く」(『味道』『白詩集』卷

「上元」「蕊珠」と「金籙」「玉皇」

二十三)と述べたことは良く知られている。この茅山派遣の聖典である『眞誥』卷一九「翼眞檢」には、「眞誥者、眞人口授之誥也」とあり、仙界の眞人が口ずからさずける誥(おつけ)であるとされる。元稹の「爲蕭相謝告身狀」(『元稹集』卷三十六)の「鳳 眞誥を銜み、

虬 天書を捧ぐ」なる一文の「眞誥」もこれを受けたものであろう。元稹は、「陶弘景は一代の高人」(『授羅讓工部員外郎制』『元稹集』外集補遺卷四)と述べて、茅山派遣の大成者であり、『眞誥』の編述者でもある陶弘景(四五六―五三三)に敬意を拂っていることも注目し、値しよう。梁朝において、陶弘景は、茅山に隱居して仙道を研鑽しつつ、武帝から時の動靜の顧問を受け世に山中宰相と稱されたとは史乘に有名な話である。

元稹と『眞誥』との關係は、名作『鶯鶯傳』(『元稹集』外集補遺卷六)にも見られる。『鶯鶯傳』は、元稹が作者とされる『唐代傳奇』の中でも屈指の戀愛小説で、元代に王實甫の『西廂記』を生んだように後世への影響も大きい。そのプロットは、張生という書生が蒲郡の普

救寺に寄寓した際、崔家の未亡人一族の危難を救い、その娘の鶯鶯と相思の仲となったが、やがて科擧の受験のために別れ、その後、年を隔てて再會するというものである。中に鶯鶯の心理描寫、張生の所謂「尤物」論が展開され、更に「會眞詩」三十韻が披露されているところも興味深い。

別名の『會眞記』とは、「神仙のような美女に會う物語の意」であり、作品全體が道教的雰圍氣に包まれているが、その中でも特に道教的色彩の強いのは、「會眞詩」であり、また、「霓裳羽衣の序」が登場することである。

元稹の前掲の「法曲」の半ばには、道教的雰圍氣の濃厚な音樂である「霓裳羽衣」について「明皇の度曲 新態多し、宛轉侵淫して沈著し易し／赤白桃李 花名に取り、霓裳羽衣 天落と號す」と歌い、「琵琶歌」でも、「霓裳羽衣 偏えに宛轉たり」（『元稹集』卷二十六）と詠じている。また、白居易の「長恨歌」（『白詩集』卷十二）に「漁陽鞞鼓 地を動して來り、驚破す 霓裳羽衣の

曲」とあるのは餘りに有名だが、その白居易の「霓裳羽衣歌」（『白詩集』卷二十一）なる詩の中では、「上元は鬢を點じて 萼緑を招き、王母は袂を揮いて飛瓊に別る」と詠じられる。白居易はこの二句の自注で「許飛瓊、萼緑華は皆 女仙なり」と言っているが、「上元」と「王母」については、李白に「上元は誰が夫人ぞ、偏えに王母の嬌を得たり」（『上元夫人』、『李太白集文集』卷二十）と代表的な女仙である西王母とその娘という上元夫人を讀む歌がある。上元夫人と許飛瓊は『漢武帝内傳』、「萼緑華」は、『眞誥』に見える仙女である。白居易の「霓裳羽衣歌」では、「散序 六奏 未だ衣を動かさず、陽臺の宿雲 慵くして飛ばす／中序 擘駢として 初めて拍に入り、秋竹竿裂けて 春冰拆く」とあるが、ここは「鶯鶯傳」の「霓裳羽衣の序」と關わる。

「會眞詩」の冒頭十句、半ば二句、末尾四句では、次のように歌っている。

微月 簾櫳に透り、螢光 碧空を度る
遙天 初めて縹緲、低樹 漸く葱朧

龍吹 庭竹を過ぎ、鸞歌 井桐を拂う

羅綃 薄霧垂れ、環珮 輕風に響く

絳節 金母に隨い、雲心 玉童に捧ぐ

(中略)

言に瑤華圃より、將に碧帝宮に朝せんとす

(中略)

海闊くして誠に渡り難く、天高くして衝き易からず

行雲 定所無く、蕭史 樓中に在り

「瑤華圃」「碧帝宮」について、周相録の校注では、

「瑤華圃、古代神話傳説中神仙所居之處」、「碧帝宮、玉

皇大帝所居之宮、此借指長安」と言う。道教の最高神と

しての「玉皇大帝」の稱號が定まるのは、北宋時代なの

でややフライング氣味だが、「瑤華圃」「碧帝宮」が道教

的な名稱であるとの感覺はその通りであろう。また、

「會眞詩」冒頭十句の「金母」について、周相録の校注

では、『眞誥』『甄命授』に「所謂金母者、西王母也」と

説明するところを掲げ、楊軍の箋注では、『雲笈七籤』

一一四に「西王母者、九靈太妙龜山金母也」あるのを引

「上元」「蕊珠」と「金籙」「玉皇」

用しているのは、何れも安當なところである。末尾二句の「蕭史」は、周知のように劉向の『列仙傳』に「善く簫を吹く」として登場する人物である。

さて、次には、同じく艶詩の「離思五首」(『元稹集』

外集補遺卷二)を取り上げよう。因みに「鶯鶯詩」を第

一首に加えてする「離思六首」とする説もある。その第

二首と第四首は、また、道教と關わりと見られる作品で

ある。

山泉 散漫として階を繞りて流れ、萬樹の桃花 小

樓に映ず

閑に道書を讀み慵くして未だ起きず、水晶の簾下

頭を梳るを看る(第二首)

曾か經 滄海は水爲り難く、除卻す 巫山に是れ雲た

らざるを

取次に花叢 懶く回顧すれば、半は修道に縁り 半

は君に縁る(第四首)

この「道書」とは何かは判然としないが、「修道」と

いう言葉との關わりと後述する元稹の司馬承禎に對する

強い關心からして、隨所に「修道」の語が重く用いられている司馬承禎の主著「坐忘論」の事が氣に掛かる。

さて、元稹は貞元十九年（八〇三）に韋叢と結婚した。この韋叢は元和四年（八〇九）に世を去り、後に繼室の裴淑を娶ることになる。元稹を巡る主な女性は、この二人に韋叢と結婚する前に戀愛關係にあったとされる雙文がおり、この三者に關する主な文學作品として、いわゆる艶詩と「鶯鶯傳」「悼亡詩」「贈内詩」とを擧げることができる。

言うまでもなく、「悼亡」のテーマは、晉の潘岳の「悼亡詩」によって開拓された。この「悼亡詩」の唐代における狀況について、入谷仙介氏は「韋應物によって再生された悼亡詩をさらに深化させたと云えるのが元稹である。彼には潘岳によって代表される六朝の悼亡の傳統を意識しつつも、自分こそは、それを踏まえながら新しい悼亡を作るのだという意欲があった」と述べる⁹⁾。

元稹の悼亡詩の代表作は「三たび悲懷を遣る」（『元稹集』卷九）である。「三たび悲懷を遣る」も潘岳の「悼

亡詩」に倣って三首の連作となっている。山本和義氏は、元稹の「三たび悲懷を遣る」について、次のように述べる。「唐詩三百首」の編者、蘅塘退士は、この三首を評して、「古今の悼亡詩は、棟に充つるも、能く此の三首の範圍を出づる者、無し。淺近なるを以つて、之を忽かにする勿れ」と、きわめて高く評價している。（中略）この「淺近」こそが、この詩の最も特長的な點であり、この詩の成功も、又、この點によつてゐる。潘岳の「悼亡詩」について、高橋和巳氏は、「潘岳論」の中で、「潘岳の詩の表現法は、代詠詩（代作された歌、筆者へ山本氏）や模擬詩が必然的に持つ、ある一般性をより多く持つてゐる」と述べてゐる。潘岳の「悼亡詩」を意識して作られた、元稹のこれらの詩は、それとは對蹠的な特長を持つてゐる。元稹の詩は、完全に元稹と韋叢との個性の中で、うたわれてゐる。しかも、それは、日常的な平面で、捉えられてゐる¹⁰⁾と。

「淺近」と「日常的な平面で捉える」とが、同じ意味なのかどうか、判然としない部分もあるが、元稹の「三

たび悲懷を遣る」の第三首などは、次に見るように現世的であることは確かなようである。

閑坐して君を悲しみ亦た自ら悲しむ、百年都て是れ幾多の時ぞ

鄧攸は子無くして尋に命を知り、潘岳は亡を悼みて猶お詞を費やす

同穴の宵冥 何ぞ望む所ぞ、他生の縁會 更に期し難し

唯だ終夜長く開ける眼を將て、平生未だ展かざる眉に報答せん (三遺悲懷の三)

「他生の縁會 更に期し難し」と述べるところに輪廻轉生に懷疑的で、現世的な元稹の傾向がよく現れていると見られる。

さて、艶詩の中で、「古決絶詞三首」(『元稹集』外集補遺卷一、又『才調集』所收)は、雙文との別離直後に制作された作品とされる。その第一首では、相思であった二人の別離は次のように詠じられる。「乍可 天上の牽牛織女の星と爲るも、庭前の紅槿の花(枝)と爲るを願わ

ず／七月七日 一たび相見ゆ、 相見て故心 終に移らず／那んぞ能くせんや朝に開き暮に飛び去りて、一えに東西南北に吹くに任ぬるを／分 兩には相守らず、恨兩には相思わず／對面 且つ此の如し、背面 當に知る可し／春風撩亂として伯勞は語る、況んや是れ此の時抛去の時／手を握りて苦に相問うも、竟に後期を言わず／君の情の既に決絶し、妾が意 已に參差たり／借如死生の別ならば、安ぞ長く苦悲するを得んや」と。

そして、第三首の後半は、次のように結ばれている。「曙色 漸く瞳矐 華星次いで明滅／一たび去らば 又た一年 一年 何の時か徹る／此の迢遞の期有るは 死生の別に如かず／天公 隔に是れ相憐れむを妬めば 何ぞ 便ち相決絶せしめざる」と。(『全唐詩』も参照)

第一首の七夕に關しては、元稹よりやや後輩の李商隱(八一二―八五八)がこの「七夕」を道教に結びつけて「辛未七夕」(『李商隱詩歌集解』一一七二頁)の中で、「恐らくは是れ 仙家の別離を好むならん、故さらに迢遞に佳期を作さしむ」と詠じているのが思い出される。また、

第三首の「天公」の語は、宋代以降の道教の最高神である玉皇大帝を親しみをこめて呼ぶ稱呼とされて行くのであるが、中唐においても韓愈（七六八—八二四）や柳宗元（七七三—八一九）の詩文に登場し、元稹の詩にも他に三例が存する。それを列挙すると「竹枝 鳳を待ちて千莖直く、柳樹 風を迎えて 一向に斜めなり／總て天公に雨露を霑され、等頭 成長して生涯を盡す」（「放言五首の其二」『元稹集』卷十八）、「三春 已に暮れ 桃李傷われ、棠梨 花白く 蔓菁 黄なり（中略）天公の此の意 何ぞ量る可き、長えに爾が輩を教て 時節に長ぜしむ」（「村花晚（庚寅）」『元稹集』卷二十六）、「吾は會せず 天 爾が輩を教て子孫多からしむを、天公に告訴するも 天は言わず」（「樹上烏（癸卯）」『元稹集』卷二十六）である。三例は動植物の生長を支配する存在と見られているが、先の「古決絶詞三首」の第三首の場合には人間の運命を支配する存在と見られているのである。

第三節 「金籍」・「靈飛」と

『黃素四十四方經』

白居易は「思舊」の詩において、具體的な名前を擧げて彼と同時代の士大夫たちの「服食」の流行を批判しており、そこでは、元稹も秋石を用いていた廉で糾弾されている。「閑日 一たび舊を思うに、舊遊は目前の如し／再び思うに 今何く^{いず}に在るや、零落して 下泉に歸せり／退之は流黄を服すれども、一たび病みて 訖^{つひ}に痊えず／微之は秋石を錬りしも、未だ老いずして 身は溘^こ然たり／杜子は丹訣を得て、終日 腥羶を斷つ／崔君は藥力を誇り、冬を經て緜を衣ず／或いは疾み或いは暴^{おこ}かに天し、悉く中年を過ぎず／唯だ予れ服食せず、老命反りて遲延す／況んや少壯の時に在りて、亦た嗜欲の爲に牽かるをや、云々」（「思舊」『白詩集』卷二十九）

退之は韓愈、杜子は、杜元穎を指す。崔君は、陳寅恪氏は崔羣とするが、朱金城氏等が言うように崔玄亮のことであろう。崔玄亮が道教に親しんでいたことは、深澤

一幸氏「崔玄亮の道教生活」に詳しい。微之は、言うまでもなく、元稹の字である。秋石については、『周易參同契』巻上に「黃帝美金華、淮南鍊秋石」と見えるが、深澤氏は、先の論文で「微之（元稹）は尿中から秋石という黄金の丹薬を鍊製した、云々」と説明している。

元稹と同年の制擧の士大夫たちと道教の關係については、白居易に關しては蜂屋邦夫氏の「白居易の道家道教思想」などの一連の研究、三浦國雄氏の「白樂天における養生」、川原秀城氏の「白居易と服餌」（『毒薬は口に苦し』所収）等の先行研究があり、また、吉川忠夫氏に「靈飛散方傳信錄」の周邊」等の研究が有りながら、不思議なことに元稹と道教との關係を考察した專論は、管見の及ぶところ見られないようである。¹²⁾

さて、この中、吉川氏の論考は、唐の憲宗の元和七年（八一二）四月五日の日附を備える高陽の齊推の「靈飛散方傳信錄」を扱ったものであるが、元稹・白居易・崔玄亮らが活躍した元和時代の道教の様子が活寫されている。その二三を以下に掲げよう。

例えば、齊推の「傳信錄」には、彼が崔玄亮と交わした會話の中で、「求學の士は賒謬を探擬し、近實を營むことを恥じて虚しく遐闊に務め、未だ凡鄙を易めずして便ち飛昇せんことを冀い、金丹をば坐らに延きて仙籍をば立ちどころに致さんと謂う」とする「仙籍」への志向が語られている。

また、唐末五代の碩學道士である杜光庭の『道教靈驗記』（卷十六）では、「崔玄亮修黃籙齋驗」の中で、「崔公は常に黃庭、度人、道德の諸經を持し、未だ嘗て曠（おろそ）かにせず」と崔玄亮が重んじた道教經典に言及している。更には、白居易が崔玄亮のために表した「唐故虢州刺史贈禮部尙書崔公墓誌銘并序」（『白文集』卷三十三）では、崔玄亮が「三元道齋」、即ち「三元齋」を行っていたことを書き留めている。このような事例は、元稹と道教との關係を考察する際に、大いに参考となるものである。

ところで、先の論文の「靈飛散」と「靈飛」についての吉川氏の所論を纏めると、靈飛散の名は、つとに、

『抱朴子』にも、(中略) 仙薬としてみえてはいるものの、「靈飛」は、たとえば朱昭之の「難願道士夷夏論」(『弘明集』卷七)に、「靈飛羽化」と昇仙とほとんど同義に用いられており、『抱朴子』の靈飛散が「靈飛散方傳信錄」の靈飛散とおなじ散薬であると即断するわけには必ずしもゆかぬであろう、と云うことになる。

この「靈飛」に關連して、茅山派の重要な典籍・經典に關する記述を繙くと、『漢武帝內傳』に上元夫人が武帝から與えられた十二事の筆頭に「五帝六甲左右靈飛之符」が掲げられ、これに關連して『紫陽真人內傳』の本文に「(周義山) 復登王屋山、遇黃先生、受黃素神方五帝六甲左右靈飛之書四十四訣」とあり、後の「周君所受道眞書目錄」では、「王先生黃素神方五帝六甲左右靈飛之書及二(四) 十四訣在王屋山中」と記載しているのが、大いに注目される。『眞誥』に見える卷十四の「靈飛六甲」の書や卷五に重要な上清經典を連ねる中の七番目の「黃素神方四十四訣」も勿論これに關わる記述である。現行道藏の『上清瓊宮靈飛六甲左右上符』は、この「靈

飛六甲」の書に連なる經典であるが、符中に「甲戌黃素玉女名神光字飛廉」と「飛廉」という名の玉女が登場するのが、先述の「開元觀」に關わる詩との關係で注目される。

次に「仙籍」について論じよう。元稹の「天壇上境」(『元稹集』卷十六)では、「貞元二十年五月十四日、夜天壇の石幢の側に宿る、十五日 整屋の馬逢少府の書を得、予の遠く天壇に上るを知り、因りて長句を以て贈らる、篇末に仍お云う、靈溪に試爲に金丹を訪うと、因りて壇上にて還し贈る」と前置きして、次のように詠じる。「野人の性僻 窮めて深僻、藝畧官閑 官に似ず／萬里の洞中 玉帝に朝し(自注・上有洞周萬里、九光の霞外天壇に宿る／洪漣 浩渺として 東溟曙に、白日低回して 上境寒し／因爲て南昌にて 仙籍を検するに、馬君の家世 還丹を奉ず」と。

ところで、元稹の詩の中には、この「仙籍」を尊んで、「眞籍」と呼ぶ例もある。そして、「仙籍」を更に尊んだ呼稱が「金籍」である。白居易には、「微之の江陵にて

病に臥すと聞き、大通中散・碧腴垂雲膏を以て之に寄せ、因りて四韻を題す」という詩がある。「己に一帖の紅消散を題し、又た一合の碧雲英を封ず／人を憑たのみ 江陵に寄せ向つて去らしむ、道路 迢迢たり 一月の程／未だ必ずしも江上の瘴を治する能わざれども、且つ圖る 遙かに病中の情を慰めんことを／到る時 想い得たり 君が拈とり得て、枕上 開き見て 眼暫く明らからんことを」(『白詩集』卷十四)と。

元稹の「予 瘴を病み、樂天 通中散・碧腴垂雲膏を寄せ、仍お四韻を題して以て遠懷を慰む、開拆の間、因りて酬答有り」(『元稹集』卷一七)は、この詩に唱和したものである。

「紫河 變鍊す 紅霞の散、翠液 煎研す 碧玉の英／金籍の眞人 天上に合し、鹽車の病驢 軛前に驚く／愁腸轉せんと欲して 蛟龍吼え、醉眼初めて開き 日月明らかかり／唯だ君の治し得ざるを思うこと有るのみ、膏は銷え雪は盡こき 意こころは還た生く」とある。

元稹の詩の「紅霞散」は、白居易の云う「紅消散」で

あり、即ち「大通中散」である。また、「碧玉英」は、同じく「碧雲英」であり、即ち「碧腴垂雲膏」である。「金籍」は、今は江陵士曹參軍である元稹から見れば、中央政府の翰林學士として「朝籍」にある白居易のことを言ったものであり、それを道教における金色の「仙籍」を有するとしたものであろう。

また、元稹は、「翰林白學士の書に代うる一百韻に酬ゆ」でも、次のように詠じる。「鶴侶 茲れより洽く、鷗情 轉た自ら靡く／分張 品命殊にし、中外 却つて驅馳す／出入 金籍と稱し、東西 碧墀に待す／鬪班雲洵湧し、開扇 雉參差す」と。

この詩の「金籍」は、「朝籍」にあることを意味するのであろうが、また、既に見たようにこの詩の序は「玄元氏の下元の日」で始まるのであり、この「金籍」にも道教における金色の「仙籍」の意味合い込められていて不思議ではない。

ところで、この「金籍」の語が、茅山派の重要經典に現れるのは、先に「靈飛」に關連して名前を擧げた「黃

素神方四十四訣」、即ち『黄素四十四方經』が有力なものと見られる。

『黄素四十四方經』は、吉岡義豊氏の『道教經典史論』⁽¹³⁾に紹介されている敦煌ペリオ文書二三七一（以下P二二七一を略記する）の『無上祕要』卷三十三には、『洞真黄素册四方經』として、「神仙の定分」に關する經文が引用されている。以下に敦煌本、道藏本『無上祕要』、道藏本『上清太上黄素四十四方經』の當該部分を對照してみよう。

- (1) 太上道君曰、夫有宿命應得見此文者、皆玄挺開會、必有神仙定分、此之神經、不傳於世、又妄說之者、則三天剌姦、上聞帝君、告子之罪、以爲宣漏之愆。

（敦煌本、開元六年書寫、『無上祕要第卅三』所引の『洞真黄素册四方經』）

- (2) 太上道君曰、夫有宿命應得見此文者、皆玄挺開會、必有神仙定分、此之神經、不傳於世、又妄說之者、則三天剌姦、上聞帝君、告子之罪、以爲宣

漏之愆。

（道藏本『無上祕要』卷三十三所引の『洞真黄素四十四方經』）

- (3) 夫有宿命、應得見此文、皆玄挺開會、必有神仙定分也、此之神經、不傳於世、道說之者、則三天剌姦、上聞帝君、告子之罪、以爲宣漏之愆。

（道藏本『上清太上黄素四十四方經』）

この「神仙の定分」が有るといふ考え方は、仙界に定まった戸籍がある、「仙籍」があるという思想、更には黄金の戸籍、「金籙」の存在までも想定することに連なつて行くものであろう。

さて、現行道藏本『上清太上黄素四十四方經』の構成を見てみると、冒頭「太上大道君は玄靈秀虛にして、維任上化し、千眞を理會し、十方を參謁す」と「序論」が説き起こされる。そして、先の「神仙の定分」などについて述べる部分で「序論」が終わり、次に「凡」の字で始まる四十四條があり、最後に「按ずるに此の經文は、神法眞妙にして、修生の人をして、立用して以て身を治

むるを得せしむるなり」などと説く「結語」部分がある。「序論」と「結語」の中間にある「凡」の字で始まる四十四條が、即ち經名の四十四方の由來なのであろう。この四十四方の最初の一條は、「盟信」を述べたところで、その一部は『太平御覽』卷六七六に「太上（黃）素經曰、凡受太上黃素經者、傳盟用玉札一枚、長一尺五分、廣一寸四分、又云、有三元秀簡」と引用されている。第二條から第四條は、それぞれ『大洞真經三十九章』、『太丹隱書金華洞房及び雌一寶章』、『太丹隱書洞真玄經』を讀むことを進めており、第五條では、「凡そ能く三經に精進し、奇文を説解して、蕭浪として上契し、軌味玄遠なる者は、其の人みな必ず瓊書秀簡、金籍に玉名あり」と述べているが、この四條ほどが四十四方の前半の山場なのである。そしてここに「金籍」の語が用いられているのは注目すべきであらう。

第四節 「玉皇」・「玄元」・「虛皇」

元稹の詩文の中では、道教世界に君臨する高位の神々

の名が散見する。「虛皇」「玉晨」「老君」「玄元」そして、「玉皇」などである。

先ず、「老君」「玄元」「聖祖」に關連して、元稹の老子觀を見ておこう。元稹の老子觀を端的に示すのは、「人道短」（『元稹集』卷二十三）に「老君 五千字を留め得て、子孫萬萬 聖唐と稱す、謚して玄元帝と作し、魂魄は天堂に坐す」と述べる言葉であらう。「老君」は、道教で老子を神格化して呼んだ呼稱、具に「太上老君」と言う。「五千字」は『老子道德經』である。周知のように、唐王朝では、老子を皇室の先祖として敬い、老子に對して「玄元皇帝」の尊號を奉っていた。玄宗の時代になると、國初からの老子に對する尊崇は一層、甚しくなり、玄宗は「我が遠祖玄元皇帝は、道家號する所の太上老君なり」として、天寶二載、天寶八載の二度にわたって老子に對して尊號を贈り、さらに天寶十三載（七五四）には、大聖祖高上大道金闕玄元天皇大帝の稱號を贈るに至っている。元稹は、玄宗のこの老子信仰・玄元皇帝信仰の支持者であつたと見られる。

次に『老子道德經』については、玄宗が司馬承禎に五千三百八十言の『老子道德經』を判定させたことは廣く知られている。元稹には、「重修桐柏觀記」なる一文があり、吳の葛玄に始まり、唐の司馬承禎に中興された桐柏觀の歴史に言及し、その中で、睿宗時代の桐柏觀の再建、玄宗時代の『老子道德經』の刊定と三體の書による記載という司馬承禎の事跡を次の通り述べている。「實に唐の睿祖、民の愚かなるを悼み、乃ち郡縣に詔して、其の封隅を厲す、環四十里、樵蘇するを得る無し、復た桐柏に觀し、用て厥の初めを承く、司馬氏を俾て、時の靈都に宅せしめ、馬も亦た勤止、其の徒を率合す、兵は鋸鋸を執るも、獨り斧鋏を持し、手は上清に締ぶも、實は我が軀を勞る、稜稜たる巨幢、粲粲たる流珠、萬五千言、體は其の書を三にし、之を妙臺に置きて、以て厥の圖を永にす」(『元稹集』外集續補卷二、また『道家金石略』)と。

司馬承禎(六四七—七三五)字は子微、河内温の人。先述した茅山派遣教の集大成者、陶弘景の三傳の弟子であ

り、宗師潘師正の直接の弟子である。彼は睿宗、玄宗の信任を受け盛唐の道教界に重きをなした。主著と目される『坐忘論』では、序文で坐忘の法は、「略七條を成し、以て修道の階次と爲す」と説く如く「敬信」「斷縁」「收心」「簡事」「眞觀」「泰定」「得道」の七段階が設けられ議論が展開される。この外、桐柏山の王子晉信仰に關する『上清侍帝晨桐柏真人眞圖讚並びに序』などの著作がある。

元稹の「東川に使す」(『元稹集』卷十七)の連作の中に「問囚を慚す」の詩があり、さらに自注には「蜀門に夜行し、順之と司馬鍊師の壇上に在りて出處を話せし時を憶う」と述べて次のように詠じる。「司馬子微 壇上の頭、君と深く結ぶ 白雲の儔／尙平の村落 連買を擬り、王屋の山泉 別遊を爲す／各おの陸渾に待ちて一尉を求め、共に三徑を資りて 同に休むに便なり／那ぞ知らん 今日蜀門の路、月を帯びて夜行し 問囚に縁るとは」。

この詩によれば、元稹はこれより以前に司馬承禎の王

屋山の道壇を訪れたことが知られ、元稹の司馬承禎に對する關心の深さが窺われる。

元稹が白居易の詩に唱和した「樂天の吳丹に贈るに和す」(『元稹集』卷六)を讀むと、この吳丹は中々に道教に精通した人物であつたと見えて、それに觸發されてか道教色の甚だ濃厚な詩篇となつてゐる。以下にその重要なところを見てみよう。「吳生の面を識らざるも、久しく知る吳生の道／跡は世名に染むと雖も、心は本と天老を奉ず／雌一もて命門を守り、廻九もて血腦を填む／氣に委ねて榮衛は和し、津を咽みて顔色は好し(中略)伊れ予れ 固に童味より、眞を希うこと亦た早しと云う／石壇 玉晨の尊、晝夜 長く自ら掃き／密印して丹田を視、神を遊ばして三島を夢み／萬過す 黃庭の經、一食す 青精の稻／冥搜す 方朔の桃、結念す 安期の棗」文中に『黃庭經』が出てくるように、「雌一」は『黃庭内景經』の「五行章第二十五」、「命門」は「脾部章第十三」、「廻九」は「徊九」として「脾長章第十五」、「血腦」は「高奔章第二十六」、「榮衛和」は「心部章第十」

の言葉を踏まえている。

また、「玉晨の尊」については、周相録の『元稹集校注』では、陶弘景の『眞靈位業圖』の「第二中位」に置かれる「上清高聖太上玉晨玄皇大道君」を擧げているが、これに關連する神格としては、『黃庭内景經』の「上清章第一」の「太上大道玉晨君」、また陶弘景の『眞誥』卷五の注の「太上高聖玉晨大道君」などを擧げることができる。茅山派の中での「太上道君」の尊崇と關わるものと見て良いであらう。

さて、「陽城駅」(『元稹集』卷二)「青雲駅」(『元稹集』卷二)は、三十二才の時に、江陵士曹參軍に左遷された折の制作とされるが、道教に關する記述では落差が大きい。先ず、「陽城駅」の末尾では、次のように不平を訴える。「今來りて此の驛を過うに、汨羅の洲を弔うが若し、祠曹は羊祜のために諱むに、此の驛は何ぞ侔しからざらん、我は公諱を避くるを願うに、名づけられて賢を避くるの郵と爲る、此の名に深意有り、賢を蔽うは天の尤むる所、吾は玄元の教を聞くも、日月は九幽より冥し、

幽陰に蔽翳される者は、永く幽陰の囚と爲らん」。相當な落ち込み方である。「汨羅」は言うまでもなく「賢人失志」の歌とされる「離騷」の作者、屈原が身を投げた場所。

次の「青雲馭」は、極めて道教色の強い詩で、元稹の仙界觀が露出しているものである。

復た聞く閭闔の上、下視すれば日月低し

銀城 蕊珠の殿、玉版 金字の題

大帝 南北に直く、群仙 東西に待す

龍虎 隊仗を儼にし、雷霆 鼓鑿を轟かす

元君 庭内を理め、左右は 桃花の蹊

丹霞は 爛あやかに綺を成し、景雲は 輕やかなること

綈の若し

天池 光 濼濼として 瑤草 緑 萋萋たり

衆眞 千萬の輩、柔顔 盡く美の如し。

この仙界に南面する「大帝」とは何者かと思うが、後に次のように詠じるところからして、恐らく「虚皇」のことを別稱したのであろうか。

虚皇に 見ゆるを願わず、雲霧 重重として翳れば
大帝 安んぞ夢みる可けんや、閭闔 何に由りてか
躋まん

元稹はこのように「虚皇」を仙界に君臨する存在として歌っているが、一方、友人の白居易には、「元始天尊を書けるの讚 並びに序」(『白文集』卷二十)があり、元和二年から六年の作とされ、こちらは徳宗の命日に關わる公式のものである。そこでは、序で「元始天尊」について、「元なる者は諸天の先、始なる者は萬靈の母なり、混じて一と成り、強いて以て名と爲す、至れるかな無上の尊、是れを以て號と爲すを得たり」「以謂らく元始天尊なる者は、眞儀遠からず、相に隨いて生ず、神用は方無く、念に應じて至ると」と述べ、更に讚の冒頭では、「玄聖 何くにか在る 天上の天、往きて之に従わんと欲すれば皆として縁よ無し」と語っている。元稹・白居易ともどもの「虚皇」・「元始天尊」に對する敬意が窺われる。なお陶弘景の『眞靈位業圖』では、第一中位に「上合虚皇道君應號元始天尊」が擧げられているのは周

知のところであろう。また、唐末・五代の碩學道士である杜光庭の『道教靈驗記』卷十六や『神仙感偶傳』卷一に依れば、崔玄亮が湖州の紫極宮で黃籙齋を行ったところ、三百六十五羽の鶴が壇上を集まり、その内の一羽が「虚皇臺」の頂に立ち、「紫氣が壇所まで彌亘した」ので、白居易が「吳興の鶴の讚」と作ったとも傳える。

因みに「青雲駅」では、仙界に「桃源郷」を思わせる「桃花の蹊」が登場するが、唐代においては、「桃源郷」は道教の仙界と考えられており、元稹の道教に關わる詩には、「桃」が頻出する。また、「青雲駅」では、「鳳皇梧桐を占む」と鳳皇と桐が仙界に登場するが、これも元稹の道教に關わる詩の特徴である。

次に宋代以降の道教との關連で注目されるのは、「玉皇」に關することである。「玉皇」とは道教史においては、通常、北宋の眞宗時代にその信仰が確立した玉皇大帝を指す。そして中唐において「玉皇」に言及する例としては、韓愈と柳宗元の次の詩などが注目されよう。先ず韓愈の例のその一は「夜 張徹を領して虚龕に投じ、

雲に乗りて共に玉皇の家に至る」(卷七「李花其二」)であり、今一つは「玉皇 首を領きて 歸去するを許し、龍に乗り鶴に駕りて 青冥に來る」(卷十一「華山女」)『韓昌黎詩繫年集釋』卷十二)である。次に柳宗元の例は、「界圍巖水簾」の詩に「忽ち玉皇に朝するが如く、天冕 前旒を垂る」(『柳宗元詩箋釋』卷三)と述べるものである。これらの例は、中唐における「玉皇」に對する關心を背景としているものであろう。

そして、これらの例を差し置いて、中唐において「玉皇」について詠じたものとして最も人口に膾炙しているのが、元稹の「州宅を以て樂天に夸る」(『元稹集』卷二十二)の詩なのである。

州城 迴遶して 雲堆を拂い、鏡水 稽山 眼に満ちて來る

四面 常時 屏障に對し、一家 終日 樓臺に在り
星河 簷前に向いて落ちるが似く、鼓角 地底從り
廻るを驚く

我は是れ玉皇香案の吏、謫居するも猶お蓬萊に住む

を得たり

最後に大和三年に作られた「春分に簡を陽明洞天に投ずるの作」(『元稹集』卷二十六)を見ておこう。杜光庭の『洞天福地嶽瀆名山記』では三十六洞天の第十番目に「會稽山極玄陽明洞天三百里、越州會稽縣に在り、夏禹書を探す」とあり、「禹穴」とも呼ばれる道教の聖地「陽明洞天」に元稹が玉簡を投じて神を祀った折りの作品である。因みに司馬承禎の『天地宮府圖』⁽¹⁵⁾には三十六小洞天の中、「第十、會稽山洞、周迴三百五十里、名づけて極玄大(太)元天と曰う、越州山陰縣鏡湖中に在り、仙人郭華之を治む」とある。この詩の中には様々な道教の神々を連ねる部分がある。

東皇 白日を提げ、北斗 玄都に下る

騎吏 裙 皆 紫にして、科車 幟 盡く朱なり

地侯 社伯を鞭ち、海若 天吳に跨がる

霧噴く雷公の怒、烟揚がる竈鬼の趨

投壺 玉女を憐れみ、饌飯 麻姑を笑う

「麻姑」をはじめ、「竈鬼」、「社伯」、「雷公」など民間

神とも思える神々に言及することも興味深いものがある。

結語

元稹が中晩唐の政界・文壇の重鎮であった李德裕(七八七―八四九)に贈る詩は、茅山派第十六代の宗師である孫智清とも親交のあった李德裕が道教に造詣が深かった爲もあって、道教がらみになることが多い。⁽¹⁶⁾「寄浙西李大府四首」(『元稹集』卷二十二)もその一つで、その第三首で次のように詠じる。「禁林の同直 話して情を交え、夜として曾て明に到らざる無し／最も憶う 西樓人静かなりし夜、玉晨の鐘磬 兩三聲(自注…玉晨觀は紫宸殿の後面に在るなり)」と。では何について語り合ったのかというと、第二首で次のように述べるのが鍵になるろう。「蕊珠の深處 人知ること少なし、網索して西のかた臨む 太液の池／浴殿 曉に聞く 天語の後、歩廊の騎馬 笑いて相隨う(自注…網索 太液池の上^{ほら}に在り、學士の候對、此に歇く)」とある。「蕊珠」は既に見た通

り、元稹の道教關係の詩文に頻出する言葉であるが、「藥珠の深處」とは、即ち「道教の深いところ」を意味するものと解される。

元稹も白居易と共に郭虚舟鍊師などとも交渉があり、また周隱客という方士的な人物などとも接觸がないではなかった。また、「秋石」などの仙薬を用いたことも指摘されている。

しかし、元稹の道教信仰は、「玉皇」や「金籙」への言及など、現實と緬い交ぜになっている、或いは現實と連續きな部分がありながら、玄宗の道教信仰に傾倒する「連昌宮詞」、陶弘景・司馬承禎等、茅山派の先達への敬慕、「青雲賦」及び道觀での數々の詩などの仙界の神々への描寫を見ると、どこか追憶的で、夢幻的なところにその特徴があると結論づけられそうである。

註

- (1) テキストは、冀勤『元稹集』（修訂本）（中華書局 中國古典文學叢書 二〇一〇年）を用い、周相録『元稹集校注』（上海古籍出版社、二〇一二年）、楊軍『元稹集編

年箋注』（三秦出版社、二〇〇二年）、吳偉斌『新編元稹集』（三秦出版社、二〇一五年）などを参照した。また、白居易の詩文に關しては、謝思焯『白居易詩集校注』（『白詩集』と略記）（中華書局、二〇〇六年）、『白居易文集校注』（『白文集』と略記）（中華書局、二〇一一年）を用いた。なお、岡村繁『白氏文集』（明治書院、一九八八―二〇一八年）を隨時參考にした。

(2) 拙著『赤壁と碧城』（汲古書院、二〇一六年）参照。

(3) 目加田誠『唐詩散策』（時事通信社、一九七九年）参照。また、「鶯鶯傳」についても參考にした。

(4) 花房英樹編『元稹研究』（彙文堂、一九七七年）参照。また、アーサー・ウェーリーは『白樂天』（花房英樹譯、みすず書房、一九五九年）の中で、彼（元稹）は五、六世紀に北中國を統治した拓跋（拔）魏の王室の子孫であった。（中略）五四九年にその王朝が滅びた時、洛陽に残った拓跋（拔）魏の一族は、完全に中國人となり、單に「洛陽の人」と見なされていた、などと言っている。

(5) 梁の陶弘景の『登真隱訣』下には、「若井竈鬼爲疾病者」とあり、「井戸と竈の鬼」が取り上げられている。

(6) 藤堂明保『鳳凰と飛廉―漢タイ共通基語の一面』（東方學第十八輯、一九五九年）

(7) 張振謙『元稹愛情詩へ離思』的道教文化解讀』『名作欣賞』二〇〇八年第六期）参照。

また「辨日旁瑞氣狀」(『元稹集』卷三十五)に『乙巳占』巻一「日月旁氣占」第五に見える「戴氣」などに關する事が引用される。なお、『金鎖流珠引』序の仙界の神々について叙述する部分を參考されたい。

- (8) 小南一郎「唐代傳奇小説論」(岩波書店、二〇一四年) 參照。又、第三章の武帝の「十二事」に關しては、同氏の『中國の神話と物語り』(岩波書店、一九八四年) 參照。

- (9) 入谷仙介「悼亡詩について―潘岳から元稹まで―」(『入矢教授小川教授退休記念中國文學語學論集』、一九七四年) 參照。

- (10) 山本和義「元稹の豔詩及び悼亡詩について」(『中國文學報』第九冊、一九五八年)

- (11) 注(2)拙著參照。

- (12) 深澤一幸「崔玄亮の道敎生活」(麥谷邦夫編『三敎交涉論叢續編』京都大學人文科學研究所、二〇一一年)、蜂屋邦夫「白居易の道家道敎思想」(『東洋學術研究』第二十七卷別冊、一九八八年)、三浦國雄「白樂天における養生」(荒井健編『中華文人の生活』、平凡社、一九九四年)、川原秀城「白居易と服餌」(『毒藥は口に苦し』大修館書店、二〇〇一年刊)、吉川忠夫「靈飛散方傳信錄」の周邊(『東方宗教』第九十號、一九九七年)

- (13) 吉岡義豐『道敎經典史論』(道敎刊行會、一九五五

年)、また、敦煌本については、大淵忍爾『敦煌道經』目錄篇・圖錄篇(福武書店、一九七八―七九年)を參考にした。

- (14) 『道敎靈驗記』『神仙感偶傳』については、道藏本の外羅爭鳴「杜光庭記傳十種輯校」(中華書局、二〇一三年)も參考にした。

- (15) 『天地宮府圖』(『雲笈七籤』卷二十七)では、王屋山は十大洞天の第一に、桐柏山は七十二福地の第四十四に數えられる。

- (16) 李德裕と道敎の關係については、拙著『隋唐道敎思想史研究』(平河出版社、一九九〇年)參照。